

ミルトンと恋愛詩

—Italian sonnets を中心として—

小 泉 義 男

ミルトンに恋愛感情をうたった詩があるかどうか。彼の叙事詩、即ち宗教的主題に基く、Paradise Lost, Paradise Regained, Samson Agonistes に目を向ける時、その否定面を考えざるを得ないだろう。又、彼の性格的特質を考えると、例えば、Lycidas の中で、

Were it not better done as others use,
To sport with Amaryllis in the shade,
Or with the tangles of Neaera's hair?

とか、Rome から Naples へ旅した時、その地で紹介された、Joannes Baptista Mansus Marchio Villensis に書き送った Latin eclogue, Mansus に於て、

Ipse ego, caelicolum semotus in aethera divum,
Quo labor et mens pura vehunt atque ignea virtus,
Secreti haec aliqua mundi de parte videbo,
Quantum fata sinunt, et tota mente serenum
Ridens purpureo suffundar lumine vultus,
Et simul aethereo plaudam mihi laetus Olympo.

(私は、私自身、労苦と清い心と、更に火のような男らしい勇気が運んで行く、天上の神々の住家に引きこんでいて、別世界の一角から、運命の女神たちが許す限り、この下界で起ることをすべて見下し、静かな心で、微笑と、薔薇色の光で顔を紅潮させ、天上で喜んで祝盃を挙げている。)

と示しているように、特にこの詩句の中で、Quo labor et mens pura vehunt atque ignea virtus と歌っている所の、labor, mens pura, ignea virtus と云う気質こそミルトンそのものであり、ミルトンを表わす、すべてのものと考えられていた。

又、彼の気質、性格の重要な要素。

……is a sort of moral intractableness which led Milton to sacrifice every practical or sentimental consideration to a high ideal of purity and truth…….

This latter trait, generally referred to as Milton's puritanism of character, is the one which has most impressed the public and the majority of the biographers. It is at the basis of the ordinary conception of Milton as a rigid Puritan, upright, no doubt, but on the whole unlovable, lacking in that good, warm human feeling which creates sympathy in men…….¹⁾

と、Denis Saurat が述べているような、そんな冷たさが存在していたことは事実である。それは、彼の理智の閃きと、鋭利さでもある。しかし、彼が Cambridge を、tutor Chappell と不和になって去った折、多くの人々に惜しまれ、あらゆる学友たちに称賛されながら学園を去っている。

これは、彼の性格——こちこちの Puritan 的気質——から、より人間的優しさを持った若者の、確かな証拠を示すものである。固苦しい清教徒、これは、彼に不利な印象を与えはするが、心の内部に、人間らしい優しさ、脆さ、弱さがなければ、彼の学友たちの愛情を得られなかったであろうし、愛惜されはしなかっただろう。

彼の性格の、この人間らしい面は、彼の親友、Charles Diodati との交友に於ても、特にはっきりと出ている。二人の間にとり交された手紙には、時には楽しげに、時には真面目に書かれ、普通の人達の間に見られる、愛情に満ちた、joke に富んだものであった。

更に、ミルトン家は、仮面劇や、異教的音楽に馴れ親しんでいた。(The Miltons found pleasures in masques and profane music as well as in graves and more religious studies.)²⁾

ミルトンは、Lady of Christ's と呼ばれた如く美貌で、服装も優雅であった。彼が美しいものに目覚め、美しいものに心ひかれたのは物の順序であった。1626年に Diodati に書き送った Elegia Prima には、ミルトンの心の軽快な姿が現われている。舞台に対する愛好心、そして又、女性の魅力についての彼の強い感受性が見られ、ぼんやりした恋心がうたわれている。

Saepe novos illic virgo mirata calores

Quid sit amor nescit, dum quoque nescit, amat.

(しばしば、乙女は、未経験な情熱に驚き、恋の何たるかを知らず、不知不識のうちに、恋に落入っている。)

彼はロンドンの乙女たちの魅力に夢中になり、1628年、丁度20歳の5月に、熱烈な恋をしたと述べている。Elegia Septimaの中で、次のように云っている。勿論、その若い娘とは、ふと群衆の中で逢っただけで、二度と会えなかった人であったが……と。

Elegia Prima には、田園詩を除いて、殆んど個性的表現が見あたらない、すべて形式的習作に過ぎないように思われるが、この Septima に、彼の情感をどの程度までこめているのか、どの程度、伝統的、形式的に順って作詩しているのかわからないけれど、恋愛感情の目醒めを、その情熱を、真正なものと考えてよいと思われる。

彼は街の通りを歩いている turba dearum (女神たちの群)の中から、——外を歩いている若い婦人たちは、多感な彼の目には、女神たちのように思われた——その姿が Venus によく似ている一女性を見て、愛の神 Cupid が忽ち彼の胸を射止め、彼の心が、いかに焦がれ燃え上ったかを打明けている。

miser est suaviter omnis amans (恋をするものは、すべて嬉しく、悲しいものだ)と云うのは、自己の悲しい真実の帰納である。ミルトンには、恋愛感情をうたいあげた形態を、elegy 形式と sonnet 形式に二分することが出来るが、ラテン詩に関しては他の機会に譲るとしても、この時期に於ける、ミルトンの感情の起伏を知る、より勝れた証拠が見られる。

以上の如く、ミルトンが恋愛に関心を持った詩を書いたと云う可能性を、彼の性格の一端から、或は elegy を通して知ることが出来る。

まず、本題に於ける Sonnets について考えて見ると、それは作詩の年代に基いて、二群に分けられ、約10年の間隔で分割されている。第一群は Italian sonnets を含めて、Sonnet I から Sonnet VII までで、第二群は、1642年日付の When the assault was intended to the City と云う sonnet で始まり、彼の第二の妻の死後に書かれた Methought I saw で終わっている。これらの sonnets (Canzone を含める)のうち、恋愛、或はそれに近い感情をうたいうる可能性のあるものは、英語で書かれた sonnets については、Sonnet I と、女性に宛てた次の4篇である。

IX. To a Virtuous Young Lady(1642-5)

X. To the Lady Margaret Ley (1643-5)

XIV. On the Religious Memory of Mrs. Catherine Thomason, My
Christian Friend, Deceased, 16 December, 1646 (1646)

XXIII. On His Deceased Wife (1658)

このうち2篇, XIV. と XXIII. は表題から見ても, 恋愛感情をうたったものでないことは明白だし, その当時すでに死亡していた女性であり, XXIII にいたっては, 彼の亡妻を悼み悲しんだ詩である。唯, IX. X. はまだ健在だった女性に宛てたものである。

(1) Sonnet I. 即ち, The nightingale sonnet は, 中世伝説によったもので, Sir Thomas ClanvoweのCuckoo and the Nightingale の思想から借用されている。nightingale (愛の鳥) の声を聞くことは, 恋人にとって吉兆であり, cuckoo (憎悪の鳥) の唄が春の初めに聞えたら, 恋人は失恋の運命を担うと云うのである。

Whether the Muse, or Love call thee his mate,
Both them I serve, and of their train am I.

これを内容的に考えると, 「率直な 'complaint' に属するものであるが, その立場に於ては, 戯れ, 遊戯的, 微妙な風刺的な面を持っていると見られ」³⁾ 春と恋の到来を待ち望んでいるけれど, 又その調子に於て, 内容的にも, Italian sonnets に似ているが, これらの詩程個性的でなく, 恋愛経験の表現も抽象的, 因襲的で, 確かに彼の心を伝える迫真力に欠けている。それは唯 'prays for success in Love'⁴⁾ に過ぎない。しかし, 他方この sonnet を「ミルトンの恋愛経験を直接反映させていると考えられる唯一の英詩である。」⁵⁾ と解釈する学者もあるが, ここには, 具体的対象がなく, 恋の媒介として nightingale をうたっているに過ぎない。彼は唯, 恋を恋していると云っていい。英語で書かれた, ミルトンの唯一のペトラルカ風の恋愛観念詩とでも云えるかもしれないが, 観念的, 形骸的で真に恋愛詩と呼べるものかどうか疑わしい。恐らく, 恋愛詩とは云えないだろう。

(2) Sonnet IX. Lady that in the prime の Lady が誰であるのか。積極的な証拠がなく, ミルトンの伝記作家によっても, 何ら述べられていないので, 殆んどわかっていない。従来の子孫では, 'one of Dr. Davis's Daughters, a very Handsome and Witty Gentleman' とされ, Edward Philips によると, 「彼の初めの妻, Mary Powell が事実上彼を捨てた時, 結婚したいと望んでいた。」⁶⁾ と云っているが, J. S. Smart は次のようにこの sonnet を解説している。彼の考え方, 受け取り方が最も妥当である。

It is not in any way a love sonnet. The poet is addressing a girl who is still very young—in the prime of earliest youth, with the kindness and encouragement of an elder friend. The words which offer the key to his meaning, and to the occasion when the poem was written, are:

They that overween,
And at thy growing virtues fret their spleen.

The girl to whom he speaks had been the subject of reproof or asperity, and had made the poet the confidant of her distress ; for it is impossible that Milton should have mentioned such a circumstance had she not herself informed him of it : to do so would have been an incredible breach of good taste. That some one 'fretted at her growing virtues' can only mean that in a narrow spirit she had been thought precocious and priggish.⁷⁾

(3) Sonnet X. この詩は、ミルトンの妻が実家に戻って、彼と別居中に作詩されたものと考えられている。多分 1642 年から 1645 年の間であろう。「Lady Margaret Ley は 1641 年 2 月に John Hobson of Ningwood in the Isle of Wight と結婚した。その家族は、Henry VIII の時代以来そこに住んでいた。Hobson 家は、Aldersgate Street でミルトンの隣人であった。⁸⁾」しかし、Hobson も Margaret も、1641 年、結婚前にミルトンの隣りに住んでいなかったらしいが、彼と彼等との友情は、同じ街に彼等が住むようになってから始まった、と考えられる理由もない。

Edward Philips は次のように説明している。之によっても、この sonnet が恋愛感情を表わしているものとは考えられない。

This lady, being a woman of great wit and ingenuity, had a particular honour for him, and took him much delight in his company, as likewise Captaine Hobson, her husband, a very accomplished gentleman ; and what Esteem he at the same time had for her, appears by a Sonnet he made in praise of her, to be seen among his other Sonnets in his Extant Poems.⁹⁾

ミルトンの恋愛感情について、最も関係があると思われる英詩 3 篇を簡単に考察したが、sonnet 形式の中で、恋愛感情を原体験として自己を赤裸々にうたったものは、イタリア語で書かれたもの以外は皆無と云ってよい。

では、Canzone を含めた Italian sonnets 6 篇に目を向けよう。ミルトンは初期の詩の中で、彼自身の感情に忠実で、最も遠慮しないでうたっている詩は、彼の自己顕示を外国語を通して顕わしているものであった。

the Italian sonnets, which have never received their due place in his biography, are a record of his first love.¹⁰⁾

They (Italian sonnets) would then belong to a period of Milton's life when he had expressed personal sentiments as yet only in Latin: they may confirm that he instinctively preferred the protection of an alien tongue and a literary convention when it was a matter of seeing himself as a young lover.¹¹⁾

Smart や F. T. Prince が云うように、正直な率直さで、若い詩人の感情と熱情とを表わしており、Italian sonnets は、彼の伝記では正当な評価を受けてはいないが、彼の初恋の記録であるとも推測出来る。これらは亦、その当時彼がそれまでラテン語でのみ個人的感情を表わした、ミルトンの生涯の一時期に属しており、英語では表現し得ない経験を、イタリア語の sonnets に托したと考えられる。

5 篇の Italian sonnets と、一篇の Canzone を読む時、これらの詩に詠まれ、歌われた人は、いずれも同一女性であることに気付く。即ち、イタリア生れの婦人で、ミルトンにとっては、鮮かな異国情緒豊かな美人であり、浅黒い肌と黒い瞳をし、典雅で魅惑的な振舞、その上、数ヶ国語を流暢に話した。更に、イタリア詩に親しみ、又立派な歌手でもあった。

sotto nuova idea

Pellegrina bellezza che 'l cuor bea,
Portamenti alti onesti, e nelle ciglia
Quel sereno fulgor d'amabil nero,
Parole adorne di lingua più d' una,
E 'l cantar che di mezzo l'emispero
Traviar ben può la faticosa Luna; (IV)

しかし、これらの詩の中で、同一女性への讃美、憧憬が詠われていても、その中には、自ずと作者の個性の現われ方がちがっている。6 篇のイタリア詩のうち、Sonnet II と V はより純粋な love poems であるが、彼自身の個性が明白に出ていない。

我々は書き出しの, Donna leggiadra (美しい婦人) が, il cui bel nome onora/
L'erbosa val di Reno, e il nobil varco, (その美しい名が, Reno の花に満ちた谷間や, かの有名な流れの名誉となっている) であることを知るが, Smart が示しているように, Aemilia と呼ばれたにちがいない。

この名前は、ミルトンが Reno 河と有名な流れ、即ち、Rubicon の流れを指してかけた謎の解決である。この婦人については、イタリア詩が我々に示してくれることのみを知るに止まっている。ミルトンが、1639 年、Bologna と Reno の谷を訪ずれた時に会った婦人と同一人であるが、イタリア滞在中に作詩したと云う早期論に反駁しながら Smart は、その河や流れが、イタリア旅行と何ら関係がないと主張している。

Ben è colui d'ogni valore scarco

Qual tuo spirto gentil non innamora,

(確かに、あなたの優しい魂に心を奪われない人は、全く価値のない人です。)と若い清教徒詩人は主格を避けており、colui d'ogni valore scarco は主情的でなく、colui は自己を客体化している。

Che dolcemente mostrasi di fuora,

De' suoi atti soavi giamai parco,

E i don' che son d' amor saette ed arco,

Là onde l' alta tua virtù s'infiora.

(それは、優しく、美しい容貌と、愛の弓矢の贈物の中に姿を現わしている。そして、その目の中で、あなたの気高い美徳が開花している。)

の中の、d' amor saette ed arco とは、「woman's glances で、これを weapons of Cupid, 又は星空からの influence として、人間社会の上に降り注ぐ heavenly virtue と同一視する Platonism から引用されたものである。¹²⁾ Là onde l' alta tua virtù s'infiora は、ペトラルカ風の精緻な想像力と考えられる。Laura 詩人が考えたように、「愛の女神は、弓を持って彼女の目に住み、美しい目くばせは、独身者の心を狙う矢である。¹³⁾」

Quando tu vaga parli, o lieta canti,

che mover possa duro alpestre legno,

Guardi ciascun agli occhi ed agli orecchi

L' entrata, chi di te si trova indegno;

(頑丈な山の木が揺り動かされる程、あなたが魅力的に語り、楽しく歌う時、あなたに値しないと思っている人に、あなたの目と耳の入口を十分守らせなさい。)

に於ける mover possa duro alpestre legno は、Sonnet IV の E 'l cantar che di mezzo l' emispero/Traviar ben può faticosa Luna; (中天の軌道から、疲れた

月を迷わす歌)に比して愛の情感に乏しい表現であり、直情的でなく、形式的だと考えられる。しかし、

Grazia sola di sù gli vaglia, innanti
Che'l disio amoroso al cuor s'invecchi.

(天の恩寵のみが、愛の憧れが彼の心に去りかねて、ぐずぐず躊躇わないように救ってくれる。)

は、明らかに、若い時代の経験の全く個人的記録である。

後者の Sonnet V は、ミルトンの個性、純粹感情を書き出そうと試みてはいるが、他のあらゆる sonnets に比較して最も固苦しく、因襲的である。勿論、ペトルカ風の love poetry の形式伝統の中に、ミルトンの気質を表現し、写し出すことの困難さは、Sonnet III の結論の中に示されているけれど。

Per certo i bei vostr' occhi, Donna mia,
Esser non può che non sian lo mio sole,

(ほんとうに、私の恋人よ、あなたの美しい目は私の太陽なのです。)

と云う書き出しの詩句は、love poetry に於ては、形式的、伝統的陳腐な手段である。

Smart は 'This is the poorest of the Italian sonnets.'¹⁴⁾と云っており、Carducci は、ミルトンのイタリア詩のあるものは、Dante や Petrarch の地位を与えても決して場違いだとか、不適當だと思えないと信じていたが、Italian sonnets について云うと 'i piu son duri e stentati e talora in onta alle leggi più strette della sintassi'¹⁵⁾(硬苦しく、無理なぎこちなさがあり、時には、syntax の、より厳格な法則を無視している。)と指摘している。この sonnet には、duri e stentati が価する。確かに、

Si mi percuoton forte, come ei suole
Per l' arene di Libia chi s'invia;

(その目は、太陽がリビアの砂漠を通して突き進んで行く人を、常に照りつける程強く私を打つから。)

とか、

un caldo vapor (nè senti pria)
Da quel lato si spinge ove mi duole,
Che forse amanti nelle lor parole
Chiaman sospir;

(以前一度だって感じたことがないような、暖かい、温和な蒸気が、私の苦し

んでいる所から立ち上る。それを多分恋人たちは、彼等の言葉で「溜息」と呼ぶだろう。)

或は最後のくだりの、

Quanto agli occhi giunge a trovar loco
Tutte le notti a me suol far piovose,
Finchè mia Alba rivien colma di rose.

(目に生じる程、夜毎に涙の時を刻んでいる。私の夜明けが、薔薇を冠して戻って来るまで。)

を読んでも、この詩行の基盤、基底となっている conceits には、何ら新鮮さ、斬新な手法もなく、ミルトンの感覚に欠けている。

同時代の詩人たちは、婦人の目の光を burning suns とか、 blazing arrows of fire に喩えており、それによって、彼等の心は燃え尽している。Petrarch は、この奇想が陳腐にならぬうちに、このイメージを使っていた。Boiardo は、恋とは、恋人のウインクにあったことのない人には、理解されぬものと書いている。i bei vostr' occhi,……Si mi percuoton forte, (あなたの美しい目が……強く私を打つ) と云うことは、Sonnet II に於ける d'amor saette ed arco と同じ奇想、基盤の上に立っていると考えられる。

Che come stral di foco il lato manco
Sovente incende, e mette fiamme al core.

(まるで炎の矢のように、左側がしばしば炎を噴き、心に火をつける。)

これは、Bembo の考え方である。即ち、彼の恋人の美しい瞳が、全く彼の左側を傷付けている。ミルトンの Italian sonnets を、Praz は bembista と評している。この当時、「ミルトンはすでに Della Casa の作品を読んで知っていた。」¹⁶⁾ この conceits は、イタリアからフランスへ入って行った。sospir (溜息) とか、piovose (涙する) は、恋愛作品にはお馴染みの表現であり、Petrarch では、しばしば取扱われている。

苦い苦しい涙は、詩人の顔から苦痛に満ちた溜息となって流れ出る。恋人が目くばせする時、彼の 'caldo vapor' は彼女の冷たい心を求め、彼女の憐憫を閉している氷を破ることを命ぜられる。涙の嵐、夥しい溜息の残忍な強風が、彼の心を悲しみに追いやる。

Parte rinchiusa, e turbida si cela
Scosso mi il petto, e poi n' uscendo poco

Quivi d' attorno o s'agghiaccia o s' ingiela ;

(その一部は閉じ込められ、波立って私の心の下に隠れている。そして、すこし逃れて、凍結したり、凝結する。)

そして、Tutte le notti a me suol far piovose (夜毎に涙の時を刻む) ことになる。

ペトラルカ風の詩は、窮極的には、キリスト教的観念、人間の愛と、神の愛にある類似と矛盾に根ざしている。ペトラルカ派の詩人は、sonnet を一部恋愛心理を現わす手段とし、一部何か、より抽象的なもの、宗教的価値体系を表わす方法として用いている。

それ故、ミルトンが、彼の忠実な体験、経験を余り反映させていない、非個人的に見えるものを書いたとしても当然と云える。これらの sonnets を書いた、他人を意識しすぎる未成年時代に、真剣に恋愛して、彼の学問を遠ざけ、蔑ろにすることは、彼の道徳的気質から云って、強い抵抗があったにちがいない。又、ミルトンの一途な心情が、ペトラルカ風の伝統が意味する、悔悟の、懺悔の恋愛観、気の進まない、俗っぽい調子に合わなかったことにも原因があると考えられる。

しかし、ミルトンの Italian sonnets は、単なるペトラルカ風の、ありきたりの繰返しに過ぎないと云う人は、Sonnet III と Canzone を見落していることになる。この二篇は、その発想に於て、全く端々しく新鮮で、独創的である。「Petrarch や、その他の追随者たちの中に、類似の全くない立場、状態を取扱っており¹⁷⁾」始めの5行の直喩、若い女羊飼を凶いた所は独自のものと云ってよく、ミルトンならではのと思われる。

Qual in colle aspro, al imbrunir di sera,

L' aveva giovinetta pastorella

Va bagnando l'erbetta strana e bella

Che mal si spande a disusate spera

Fuor di sua natia alma primavera,

(丁度黄昏の岩だらけの山に、そこに馴れた若い女羊飼が、異郷の美しい植物に水をやりに行く。それは、不馴れた土地で、その葉は殆んど伸すことが出来ない。故郷の温和な春からは、遙かに離れているので。)

異郷に移植された植物は、ミルトンの好んだイメージである。これは、Comus に於ける次の詩句を想起させる。

The leaf was darkish, and had prickles on it,

But in another Country, as he said,
Bore a bright golden flow'r, but not in this soil;

この sonnet の中で、ミルトンは、彼自身を、山中の岩だらけの、美しい草花の
成育しない所にいる若い女羊飼に喩えている。

“愛”——ここでは、Pellegrina bellezza che 'l cuor bea, / Portamenti alti
onesti, e nelle ciglia / Quel sereno fulgor d'amabil nero, (私の心をうっとりとき
せる異国情緒豊かな美しさ、気高く上品な振舞があり、彼女の瞳には、優しい黒ず
んだ静かな輝きがあるイタリア女性)——の求めに、il fior nuovo di strania favella
(外国の言葉と云う新しい花)を呼び醒しており、vezzosamente altera (美しい誇
り高い婦人)と詠い、'l bel Tamigi cangio col bel Arno (美しいテムズ河を美
しいアルノー河に変える)ことは、英語のかわりに、イタリア語を使用すること、
即ち、英国の女性によりも、イタリア娘に思慕の情を寄せる気持、こんな感情は、
dal mio buon popol non inteso (自国の善良な人々には到底理解されない)けれ
ど、「母国語で彼を期待している月桂冠(労作)を、彼に無理にむしり取らせようと
する無理解な、英国の若者たちの嘲笑に囲まれながら、イタリア語と云う花を、異
邦の土壌に移植しようと努力している」彼のイメージでもある。¹⁸⁾

これもあなたと云う人が好きだからで、Amor lo volse (恋がそれを望んでいる
のです)と自己を吐露している。恋故だ。恋のためなら何処までもと云う情熱と
激情が流れ、その激しさは、

io a l' altrui peso

Seppi ch' Amor cosa mai volse indarno.

Deh! foss' il mio cuor lento e 'l duro seno

A chi pianta dal ciel si buon terreno.

(私は、恋とは、他の何物も犠牲にするが、いたずらに何ものも望むことはな
いと云うことを知った。

ああ、ただ私の鈍い燃えにくい心と、厳しい、頑な心が、天上から移植する神
(愛の)にとって、立派な土壌でありますように。)

と恋の成就せんことを祈っている。

ミルトンの胸の裡を、強烈に打過ぎて行く恋の炎が感じられ、印象的でさえある。
彼は恋人の云いつけで外国語で書いている。イタリア語の方が、英語より恋をうた
う言葉として相応しい。“愛”の厳命は、次の Canzone を予想する。これは Sonnet
III に深い関係を持っており、15行詩で、そのうち12行目までは揶揄と、面白半分

の間の形式をとっている。若い男女がさざめきながら、私の囲りに集って来て、

‘Perchè scrivi

Perchè tu scrivi in lingua ignota e strana,

Verseggiando d’amor, e come t’osi ?

(何故書くのですか。何故未知の外国語で恋の歌を書くのですか。しかも、無理をしてまで。)

と云う。恋をするとは、どんなことかわかっていないと云う嘆きがある。Sonnet III に於けると同様、dal mio buon popol non inteso とうたっているように、恋故だ。恋の純粋性と云うことを、どうして理解してくれないのだろうかと恨んでいる。外国の女に恋するなんて、どうせうまく行くわけなんかないのに。うまく行きはしない。どう見ても成功する筈がない。

Dinne, se la tua speme sia mai vana,

E de’ pensieri lo miglior t’ arrivi.

(教えてくれ。あなたの希いが無駄でないかどうか。あなたの望みの最高のものが、実現するかどうかを。)

そして、

‘Altri rivi,

Altri lidi t’ aspettan ed altre onde,

Nelle cui verdi sponde

Spuntati ad or ad or a la tua chioma

L’immortal guiderdon d’ eterne frondi.

Perchè alle spalle tue soverchia soma ?’

(他の流れ、他の岸があなたを待っている。そして他の海も、その緑のふちには、時々、あなたの頭を飾るために、枯れることのない葉の、不滅の報いが芽を出している。

何故、余けいな重荷をあなたの肩にのせるのですか。)

テムズ河をアルノー河に変えなくてもいいのに。自国語で書けば、やがて月桂冠を得られるにちがいない。自国の女性に恋をすれば確実なのに、何も好き好んで異国の女性に恋する必要がないのではなからうか。色々と気詰りもあり、重荷を感じるだろうと云う疑問が出されている。

之に対して Canzone は、(形式としては、英国では sonnet 程人気がなかったが、その構造は、Spenser の Epithalamion や Prothalamion, ミルトンの Lycidas

の韻律の基礎になっていることは、よく知られている。) しばしば、詩自身に呼びかける形式をとるが、この詩も同一形式を踏んでいる。

Canzon, dirotti, e tu per me rispondi,
Dice mia donna, e' l suo dir è il mio cuore,
'Questa è lingua di cui si vanta Amore.'

(カンツォーネ (歌) よ、私はあなたに云おう。あなたは、私にかわって答えてほしい。私の恋人は、次のように云っている。

彼女の言葉は、私の心なのですから。

これは、恋の神が誇りとする言葉なのです。)

あらゆる揶揄、疑問、問に対する彼の答えは、僅か3行になって現われている。恋人は、私には生命であり、絶対です。恋人の言葉こそ、恋の神が誇りとしている言葉であり、(Questa è lingua di cui si vanta Amore) と一行に之を縮てめ、気持を統一し、何ら疑問を挟んではない。これは、恋する者の境地とも云える。簡潔さが一層その切実さを訴えている。イタリアの批評家、Eugenio Camerini は、この詩について、「全く欠点がないわけではないが、この Canzone は最も美しいものである」(vaghissima, se non al tullo irrepreensibile)¹⁹⁾と述べている。

Sonnet VI の、

Giovane, piano, e semplicetto amante,
Poichè fuggir me stesso in dubbio sono,

(私は、何と若く、優しい、純真な恋人なんだろう。私自身から、どうして逃れて行けばよいのか、迷っているのだから。)

は、その意識的な上品さ、高潔さ、心の気高さ、大胆な独善性の中に、ミルトンは自己をはるかに効果的に描出している。

Prince は 'which (Sonnet VI) in sentiment is by far the most individual of the series'²⁰⁾と述べ、この自画像は、真にミルトンの気質のものとしている。

恋する人に会って、初心な若い詩人の心が悶え、恋に直面した心情が、素直に、ありありと読みとれる。

私は愛を得るためなら、a voi del mio cuor l' umil dono / Farò divoto. (あなたに、心を籠めて、私のつつましい贈物をしよう。) fedele, intrepido, costante (誠実で、勇気のある、貞節さ) であなたに仕えよう。Di pensieri leggiadro, accorto, e buono. (考えることが、美しく、思いやりがあり、立派) であることも知っている。

Quando rugge il gran mondo e scocca il tuono
 S'arma di se e d'intero diamante ;
 Tanto del forse e d'invidia sicuro,
 Di timori e speranze al popol use,
 Quanto d'ingegno e d'alto valor vago,
 E di cetra sonora e delle Muse.

(大空が鳴り響き、雷が唸る時、

それは、それ自身完全な金剛石で鎧い、

運命や羨望、普通の人たちの恐怖や希望を意に介しないのは、

才能や、気高い勇氣や、響よい堅琴や、詩神を熱望するのと同じである。)

彼は、彼の心は大胆不屈、金剛石で武装され、力、羨望の攻撃をはね返す自信があり、何ら心配することはない。又、俗悪な恐怖、希望を超越しており、あらゆる ingegno (才能)、alto valor (気高い勇氣) を望み、cetra sonora (響よい堅琴) や Muse (詩神) に捧げられていると述べている。

だが、

Sol troverete in tal parte men duro
 Ove Amor mise l'insanabil ago.

(愛の神が、癒しがたい矢を突き通す所、唯、そこは、余り固くないことを知るだろう。)

と、intero diamante (完全な金剛石) で鎧われていても、道心堅固、道徳と云うものが、恋の前には、いかに弱く、脆い存在であることを示している。人間には、愛の神 Cupid の矢が射込まれる、柔い所が必ず一ヶ所ある。清教徒たるミルトンにも、恋に心を奪われ、恋の虜になった、こんな若い日の一面があった。これは、明らかに、彼の心を彼女に捧げた、愛の告白と云える。

更に激しく、自己の恋愛体験を、親友 Charles Diodati に告白し、その love affair を打明ける形式をとったのが Sonnet IV で、個性的、自画像的で興味深い。

Diodati e te 'l dirò con maraviglia
 Quel ritroso io, ch' Amor spreggiar solea,
 E de' suoi lacci spesso mi ridea,
 Gia caddi, ov' uom dabben talor s'impiglia.
 Nè treccie d'oro nè guancia vermiglia
 M' abbaglian sì, ma sotto nuova idea

Pellegrina bellezza che 'l cuor bea,
 Portamenti alti onesti, e nelle ciglia
 Quel sereno fulgor d' amabil nero,
 Parole adorne di lingua più d'una,
 E 'l cantar che di mezzo l'emispero
 Traviar ben può faticosa Luna;
 E degli occhi suoi avventa sì gran fuoco
 Che l' incerar gli orecchi mi fia poco.

(ディオダティー、私はあなたに、驚きをもって話そう。常に恋を蔑み、しばしば、その畏を嘲笑していた、頑な私だったが、今では、時々、心正しい男が巻き込まれる所(恋)に落入っていることを。

金髪も、薔薇色の頬も、これ程私を魅了しないが、鮮かな容姿には、私の心をうっとりさせると異国情緒豊かな美しさ、気高く上品な振舞があり、

彼女の瞳には、優しい、黒ずんだ、静かな輝きがあり、一つ以上の国語に飾られた言葉。そして、中天の軌道から、疲れた月を迷わす歌。

そして、彼女の目からは、私の耳に蠟を塗っても、私には、殆んど役に立たない程、激しい焰が迸っている。)

この中で、具体的に、彼が恋をした女性が鮮明に、しかも克明に浮彫りとなって画き出されている。前述したように、Italian sonnets に於てミルトンがうたった女性性は、Pellegrina bellezza (異国情緒豊かな美しい) 人で、その振舞は alti onesti (気高く上品)、彼女の瞳には、sereno fulgor d'amabil nero (優しい、黒ずんだ静かな輝) がひそみ、lingua più d'una (一つ以上の国語) を話し、その歌は、mezzo l'emispero (中天の軌道) から、faticosa Luna (疲れた月) を迷わす程美しい、やさしい、そんな魅惑的なタイプのイタリア女性である。

Diodati に、con maraviglia (驚きをもって) 自己の恋愛を告白するあたり、恋人の誇らしい恋の未経験は、実感があり、初めて恋をしたと友に語っている所は、自叙伝的である。私は、Amor spreggiar solea (恋を常にさげすみ)、suoi lacci spesso mi ridea (しばしば、その畏を嘲笑していた)、そんな、ritroso (かたくなな) 恋など、端無いと軽蔑していた私も、そんな心正しい、uom dabben (善良な男) も、気恥しいうように思えるけれど、今では、あの一女性にあってからは、恋に落入ってしまった。どうか、笑わないで聞いてもらいたい。

この告白は、

Nondum blanda tuas leges, Amathusia, noram,
 Et Paphio vacuum pectus ab igne fuit.
 Saepe cupidineas, puerilia tela, sagittas,
 Atque tuum spreui maxime numen, Amor.

(ああ、麗わしいアマトウシア（愛の女神）、私は、まだあなたの掟を知らなかった。

そして、私の心には、恋の炎がなかった。

しばしば、私には、キューピッドの矢を、子供の武器として蔑み、

とりわけ、おお、愛の神よ、あなたの神性をあざけていた。）

と云う Elegia Septima の前口上でうたい出されている ‘love at first sight’ によく似ており、

Degli occhi suoi avventa sì gran fuoco
 Che l'incerar gli orecchi mi fica poco.

と Sirens の歌が聞えないように、彼の耳を蠟で塗りつぶし、それから逃れようとした Ulysses のように、彼女の目から迸る激しい焔に身を任せている。

ミルトンの恋に対する態度は、常に昂奮した感受性の、或は大胆な、しかも、その中には、傲慢さと恐れとが混合したものであった。

Nè treccie d'oro nè guancia vermiglia
 M'abbaglian sì,

(金髪も、薔薇色の頬も、これ程私を魅了しない)、これ程彼が心ひかれ、愛の炎を燃やしたのは、treccie d'oro (金髪)、guancia vermiglia (薔薇色の頬)の英国娘よりも、Pellegrina bellezza (異国的情緒のある美しさ)のイタリア娘であった。英語の sonnets によりも、イタリア語の sonnets の中に、自意識から滲み出た率直な恋情を述べ、より個性的、体験的、告白的表現形式をとっている。その結果について、我々は興味をもって追跡して見るが、彼の情熱がどう受け取られたかは知る由もない。Amor lo volse (恋がそれを望んでいる)、Dice mia donna, e'l suo dir è il mio cuore, / ‘Questa è lingua di cui si vanta Amore.’ (私の恋人は次のように云っている。彼女の言葉は、私の心なのですから。これは、恋の神が誇りとする言葉です。) a voi del mio cuor l'umil dono / Farò divoto. (私はあなたに、心をこめて、私のつつましい贈物をしよう。) から判断、推測すれば、相手のイタリア女性が、ミルトンの感情を知っていたことは確かである。そして、彼に何らかの返答をしたがらないこともなかった。

彼女が彼を意識しておらなければ、イタリア語は、恋を語る言葉ですよ。恋に相應しい言葉はイタリア語だから、と云う彼女の求めはなかったと考えられる。彼女の求めに応じて、ミルトンは、イタリア語で sonnets を書いたと見ることが出来る。

Smart も次のように述べて、ミルトンとイタリア女性との関係を、意識以上のもの、真剣な love-affair と認めている。

His regard for her was something more than a passing admiration. 'I bring to you,' he writes, 'in devotion the humble gift of my heart.' It is also evident that she was aware of his feeling, and was not unwilling to make some response ; for the sonnets were composed in Italian, rather than English, at her own request, she having said, 'It is the language of love.'²¹⁾

これら love sonnets はすべて、ミルトンの青春を彩り、青春時代を示唆する、偽らない人生記録である。

若い時代に、Romance elegies によって情熱を掻立てられたように、もし彼の魂が、Vita Nuova や、dolce stil の叙事詩の影響をうけて、この時に、実際燃焼し尽したとすれば、その結果として起る、实际的、情緒的経験は浄化され、昇華したであろう。しかしながら、ミルトンの内部構造には、恋愛感情の目覚めと共に、素晴らしい自然との共感が、芽生え、大きく脹れ始めて来るのを見逃がすことは出来ない。

確かに、ペトラルカ風の詩の中では、人間の愛と、神の愛との間の闘いが根本的主題であった。ミルトンは、ペトラルカ伝統の中に、自己経験を忠実に反映させ得なかったけれど、彼の愛の中には、観念的な、精神的高まりをもった、清恬たる心を、最も純粋な愛の極致に導く Uranian love (天上的な愛) と、impetus juvenilis (若い衝動) によって、彼の心を掻き乱す、感覚的、肉欲的な Pandemian love (地上的な愛) とがあり、詩人はこの二つを身をもって知り、両者の相剋に悩んだ。そして、Elegia Septima の Postscript の中で、

Socraticos umbrosa Academia rivos

Praebuit, admissum dedocuitque iugum.

(アカデミー学園の木蔭が、私にソクラテスの流れを与え、私が落込んだ束縛から逃れる方法を教えた。この時から、恋の焰は消え、私の胸は厚い氷に閉ざられて堅くなった。)

と、20年後、青春時代に書いた詩を出版する時に、躊躇っているように、彼は Pandemian love を恐れ、そこから逃れ、その生活態度に於て Uranian love を生活中心とした。

ここで、若い日の激情は消え失せたかに見えた。しかし、その沈潜した高まりは、自然を通して、殆んど官能的とも云えるような強烈な“力”となり、やがて、後年の種々なる芸術的形態となって飛翔し、Comus, Satan, Eve, Dalila へと華やかに開花して行ったのである。

註

- (1) Denis Saurat : Milton Man and Thinker (Archon Books, London, 1964) p. 1.
- (2) Rose Macaulay : Milton (Collier Books, New York, 1962) pp. 12-13.
- (3) E.A.J. Honigmann : Milton's Sonnets (Macmillan, London, 1966) p. 87.
- (4) J. H. Hanford : The Poems of John Milton (The Ronald Press Company, New York, 1953) p. 38.
- (5) J. S. Diekhoff : Milton on Himself (Cohen & West LTD, London, 1965) p. 35.
- (6) Honigmann : op. cit., p. 106.
- (7) John S. Smart : The Sonnets of Milton (Clarendon Press, Oxford, 1966) p. 51.
- (8) Ibid., p. 53.
- (9) Honigmann : op. cit., p. 110.
- (10) Smart : op. cit., p. 118.
- (11) F. T. Prince : The Italian Element in Milton's Verse (Clarendon Press, Oxford, 1954) p. 98.
- (12) Merritt Y. Hughes : John Milton Paradise Regained The Minor Poems and Samson Agonistes (The Odyssey Press, New York, 1937) p. 139.
- (13) Smart : op. cit., p. 128.
- (14) Ibid., p. 136.
- (15), (16) Prince : op. cit., p. 100.
- (17), (19) Smart : op. cit., p. 132.
- (18) J. H. Hanford : John Milton Poet and Humanist (Cleveland, 1966) p.33.
- (20) Prince : op. cit., p. 99.
- (21) Smart : op. cit., p. 118.

(前同志社女子大学々長越智文雄先生から借用の「ミルトン論考」に多大の学恩を受けたことを付記し、感謝の意を表わしたいと思います。)